



巻頭言

保育者の視座

— OMEPメキシコ大会に参加して —

岡野雅子

OMEPメキシコ大会について

保育学に関係の深い国際機関として OMEP (Organisation Mondiale pour l'Éducation Précoce) (フランス語・「世界幼児教育・保育機構」) があります。

OMEPは一九四八年に幼児教育に携わる人々が国境を越えて子どもたちのために協力する目的で創設されました。当初の加盟国は十一か国でしたが、現在は五十六か国になっています。世界大会は三年に一度開催され、第二十一回大会(一九九五)の開催地は日本の横浜でした。それはアジアで最初の世界大会となりました。

OMEP第二十五回大会は、今年の七月十八日から二十日の三日間、メキシコシ



ティで開催され、日本からは泉千勢日本委員会会長以下二十数名が参加しました。日本人の発表は九件で、私の研究グループも、ささやかながら研究発表を行いました。

メキシコシティは、メキシコ合衆国の首都であり、政治、経済、文化の中心地です。人口は約二千万人で、世界有数の大都市でもあります。また、高原に位置している、富士山の七合目あたりの標高であるとのこと。そのため、空気が若干薄くて、階段を上るだけでもハアハアと息が切れます。

メキシコはスペイン語圏であることもあって、今回のメキシコ大会事務局からの情報の事前入手はなかなか困難でした。日本からの参加者は私を含めて多くの方々がかかりイライラしていたようです。彼の地に行ってみて、メキシコのお国柄はとてものんびりとしていて、何事もいわば「メキシコ時間」に拠っているという印象を受けました。そのような状況のもとでは、日本流に時間どおりに、約束どおりに、ことが運ばないといってイライラすることは、客観的に見ると一人相撲をとっているようなものでした。

今回の大会の参加国は二十二か国、参加者数は約七百名でいつもの大会よりも少なく、スペイン語圏の人々が過半数を占めているようでした。ヨーロッパ諸国からの参加者が少ないことが目立ちました。

子どもにかかわる者のもつべき視座について

今大会のテーマは「子どもの教育権」でした。そして、大会の主旨として次のように書かれていました。「教育は世界中のすべての人がもつべき権利であり、それは情報にアクセスできるのみならず、身体的、道徳的、心理的、知的な発達の支援を受けることを含む権利である。今日、就学前教育は社会の枠組の中で危機に直面している。グローバル化、耐性の欠如、暴力、家族崩壊、虐待、育児放棄、経済的危機、失業等々。そのために子どもに対して質の高い注意を向ける可能性は減少し、成長を促すために必要な教育的サービスを子どもが受けることができない事態を招いている。したがって、OME Pはこれらの状況を振り返り、参加、対話、分析の枠組の中で教育に向けての課題を活性化させるための連帯を押し進めなければならぬ。…」

日本で暮らしている私たちは普段気づかないことですが、子どもが生きている世界を地球規模で見たときには、子どもはさまざまな状況の中に置かれていることに改めて気づかされます。

翻って、日本の子どもの生活環境はどうでしょうか。日本は発展途上国ではなく、国民総生産は世界のトップクラスです。しかし、経済的枠組が豊かであって



も、日本の子どもたちは幸せであるとは必ずしも言えないように思うのです。

つまり、発展途上国の子どもたちには彼らの直面している課題があり、日本の子どもたちには、また別の課題があるように思います。たとえば、メキシコのお国柄は前述のようにのんびりとしていて、あくせくしていない大らかさがあります。他方、日本は社会全体がせっかちで時間に追いつた立てられるように暮らしています。それは、子どもが育つ環境として見たときに、子ども自身が生きている世界をおとなたちは尊重していると言えるのでしょうか。

保育者は子どもの身近な存在です。子どもが生きている世界を理解している専門家です。それゆえ、自己を対象化して他者に対して自己の心情を十分に説明することができない子どもに代わって、保育者は子どもの代弁者となるべき存在であるのです。これからの保育者は、日々の保育に真摯に取り組むことは当然のことではありますが、さらに、子どもが生きている生活環境を大きな視野でとらえて、そこに存在している解決すべき課題を的確に把握し、その改善に向けて努力することが大切であると思います。

OME P世界大会に出席して、「世界を視野に入れて大きく考え、行動は足元から着実に (Think Globally, Act Locally)」の視座をもつ必要性を私は改めて思いま

した。
(信州大学)